

フィリピンとの掛け橋

第3号（2002年総集編）

日本聖公会九州教区宣教局総務部発行

2002年11月22日



経緯

2001年11月の日本聖公会九州教区第93定期教区会は、フィリピン中央教区との協働関係を結び、両教区相互の交流を通してキリストへの信仰を証していくことを決めました。それに先立って、同年11月に現教育部長の柴本孝夫司祭と現総務部長の外池圭二兄がフィリピンに送られ、2002年9月には、ダグラス・ラブテン司祭が派遣されて、2週間の九州滞在で、教区内の多くの教会を訪問し、交流を深めました。

当初は、司祭2名、信徒1人の3人で、もっと各地でお話していただこうと思っていましたが、フィリピンの日本大使館からは、1名の入国許可しか出ませんでした。しかし、事前に2名の司祭から、日本で語る予定の「宣教における協働」についての説教が送られてきていましたので、総務部で翻訳しました。ラブテン司祭が各地で語られた内容と併せて、ここにご紹介いたします。また、前に2回発行しました「フィリピンとの掛け橋」も、合わせて総集編とし、ラブテン司祭の実際に動かされた日程も掲載して、今年度のまとめの報告とさせていただきます。ページ数を打ち込むために、少し装丁がかわっています。

ラブテン司祭を歓迎して、各地でいろんな行事が行われましたが、それは、別の機会に譲ることにして、総務部・フィリピン協働委員会の持っております資料での発行になりますことをお赦してください。

目次

経緯	1 頁
フィリピンとの掛け橋・第1号	2 頁
フィリピンとの掛け橋・第2号	4 頁
ラブテン司祭の説教	6 頁
キャドサップ司祭の説教	8 頁
ラブテン司祭の訪問日程	10 頁
ラブテン司祭の手紙	11 頁

フィリピンとの掛け橋

創刊第1号 日本聖公会九州教区宣教局総務部発行

2002年6月15日



ごあいさつ

ボテンガン主教

親愛なる五十嵐主教様
みなさんのパートナーである、私たち聖公会フィリピン中央教区からご挨拶申し上げます。

そちらから問われておりました、フィリピン中央教区と九州教区との友好関係についての私の考えを、お答えするのがたいへん遅くなって申し訳ありません。

2年前、私たちが正式な関係を結んで以来、友情と単なる意見の交換だけでなく、人材の交流によって、私たちの教区としての活力は強められてきた、と確信いたします。たとえば、外池兄と柴本司祭の訪問では、ある意味で、彼らは一緒に“九州教区”を持ってきてくださいました。彼らは、どの訪問先でも、ご自分の教区の実情を人々と分かち合ってくださいました。そのお返しとして、彼らのいろんな会衆への訪問、特に遠隔地の教会を訪ねられた時には、フィリピンの地域生活の現実に直面され、人々の霊的また物質的必要についての理解を深められたことでしょう。この訪問の直後、ガブリエル主教様とルーズ夫人（注・純子夫人のこと）が、フィリピン聖公会創立100周年また教区の30周年の記念礼拝に出席され、その記念礼拝で五十嵐主教様は説教してください、柴本司祭も補式の聖職団に加わってくださいました。五十嵐主教様の説教は、九州教区とフィリピン中央教区をお互いに一層近づけてくださいました。

上記の訪問は、お互いの教区における働きの実体を、それぞれの側で明瞭にし、教区との友好関係の基礎になる根拠が「キリストの体における相互責任と相互依存（mutual responsibility and inter-dependence in the body of Christ）」あるいは「宣教における協働（Partnership in Mission）」という、キリストの宣教において私たちが一つであることの具体的な表現の

必要、であるということ、を、より明らかにしてくださいました。これは、ガラテヤ書における「互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです。（ガラテヤ6：2）」というキリストの命令の実現なのです。

そのように、私たちの友好関係は、私たちの教区の生活と宣教への挑戦であると同時に、明らかに力の源であったのです。九州教区と友好関係になったことは、神様が私たちの生活に加えてくださった祝福であり、私たちがキリストの宣教のパートナーとして受け入れてくださった五十嵐主教様や九州教区の教役者、教区民の皆様に感謝しております。

始まったばかりの私たちの友好関係が、両教区の力の源として続いてゆき、人的相互訪問のプログラムや私たちの祈りを通して、お互いに影響し合い、関係し合うことが続いていきますように、そしてキリストのための共通の宣教を通して、力から力へと私たちが成長しますように、と祈ります。

私たちが皆さんのために継続して祈ると同様に、皆さんが私たちのために祈りますよう切望いたします。どうか主が、私たちを今も、いつも祝福してくださいますように。

キリストにあつて、

2002年6月3日

ベンジャミン ガイノ ボテンガン

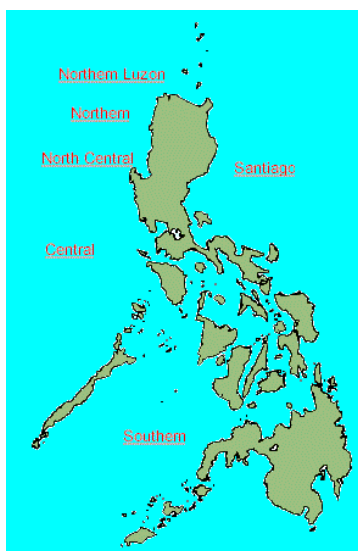
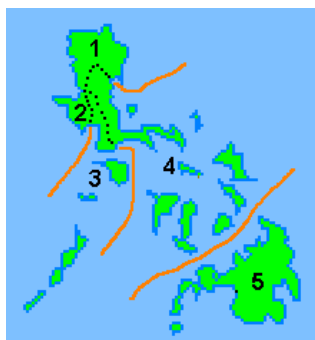
聖公会フィリピン中央教区主教

フィリピン中央教区の紋章です。裏に掲載している、フィリピン聖公会の管区の紋章と比べてみてください。皆さんは、現在の九州教区（五十嵐主教）の紋章は知っていますか？



フィリピン聖公会の教区

1. ルソン北教区
2. フィリピン北中央教区
3. **フィリピン中央教区**
4. フィリピン北教区
5. フィリピン南教区
6. サンチャゴ教区（2000年に1. のルソン北教区の東側が独立しました）



いい地図がなかったので併せて載せました。協働関係にある3. のフィリピン中央教区がわかりますか。首都圏だけでなく遠い島も含まれていますね。ポテンガン主教の言われていることがわかります。

フィリピン聖公会の概略

スペインの植民地としての歴史に伴い、フィリピンは、ローマカトリック教会が支配的でした。1898年、アメリカの統治にかわりますと、聖公会の宣教師の働きが北部や、イスラム教徒の多い南部で始まりました。1971年までに4つの教区が設立されました。1963年に最初の教区主教が聖別され、1990年に管区としての自治が認められました。信徒数 約12万人。



こちらはフィリピン聖公会の管区としての紋章です。主教の帽子に書かれているICXCは、イエス・キリストの略。その下の盾の部分は、右上はフィリピン共和国の旗の一部に似てますね。9月にフィリピンから3名のゲストが来られるので聞きたいですね。

ゲストの日程

9月12日（木）福岡空港到着、15:10	泊 福岡
13日（金）宗像。福岡 夕・主教館	泊 福岡
14日（土）移動日	泊 厳原、佐世保、長崎
15日（日）対馬、佐世保、長崎	泊 鹿児島
16日（月）鹿児島集会	泊 大口
17日（火）宮崎、延岡	泊 延岡
18日（水）延岡、大分	泊 別府
19日（木）別府観光 休息	泊 北九州
20日（金）北九州各教会訪問	泊 北九州
21日（土）北九州集会	泊 福岡、久留米、大牟田
22日（日）福岡、久留米、大牟田、	泊 熊本
23日（月）信徒研修会・熊本	泊 阿蘇
24日（火）休息 菊池、リデル	泊 阿蘇
25日（水）福岡で買い物、反省会	泊 福岡
26日（木）福岡空港から出発 16:10	

フィリピン中央教区との協働関係の祈り

慈しみ深い主よ、あなたは天地創造によってあなたの力、あなたの支配、あなたの正義を現わし、御子イエス・キリストによって深い愛を現してください。主を賛美するために選ばれたわたしたちは声を一つに合わせ、あなたに感謝・賛美の祈りをささげ、多くの人々に御恵みを分かち合う働きができるようにお導きください。特に、共に祈り、励まし、キリストの働きを担う器として与えられたフィリピン中央教区との協働関係を祝し、用いて、あなたのみ栄えを現わすことができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。 アーメン

編集後記

フィリピン中央教区と協働関係を結び、交わりを深めるにあたって、渉外を担当する宣教局総務部は、これを教区全体に浸透させるため、機関紙「フィリピンとの掛け橋」を発行することにいたしました。

今回は、先日受け取りましたポテンガン主教の手紙を紹介することを中心にまとめてみました。まだ、インターネットに公開されているフィリピン聖公会のホームページの内容ぐらいいしか情報を得ていませんが、フィリピン中央教区と連絡をとりながら、発行してゆこうと思っています。

発行所 日本聖公会九州教区宣教局総務部
〒810-0045 福岡市中央区草香江2-9-22
日本聖公会九州教区事務所内
電話 092-771-2050
E-mail d-kyushu@try-net.or.jp

フィリピンとの掛け橋

第2号 日本聖公会九州教区宣教局総務部発行

2002年8月15日

**フィリピンの仲間と共に主の恵みを受け、
主を賛美しましょう！**

主教 五十嵐正司



9月にフィリピン聖公会の信徒・聖職の3名が九州教区を訪問されます。同じ伝統をもって信仰を分かち合う聖公会の仲間の訪問を嬉しく思っています。

フィリピン中央教区との関わりは2年前の教区会から始まります。

2000年開催された教区会では「海外教会との協働活動を通して九州教区の各教会の活性化を図る」ことが決議されました。そして、2001年の教区会では協働関係を結ぶ海外教会をフィリピン中央教区と決議されました。決議に先立ち、九州教区宣教局の判断として、フィリピン中央教区が協働の相手として選ばれ、現地視察を外池圭二氏、柴本司祭がいたしました。

二人はいくつかの教会を訪ねました。外交官などが教会員である教会、これはフィリピン聖公会としては特異な存在です。又、ほとんどの教会員が中国系の人々である二つの教会。これら以外の多くの教会は貧しい、弱い立場に置かれているフィリピン人が教会員となっているところです。柴本司祭が訪ねた教会は数ヶ月前に、土地の所有者と称する元将軍が兵隊や警察官7, 80人を用いて、教会を除いて、その地域一帯の家屋を打ち壊した所でした。教会はその住民に食料や休むところを提供しましたが、次には教会まで壊されてしまいました。その土地から立ち退くと鉄条網で囲われてしまい、入れなくさせられてしまうとのことで、住人はそこに留ま

り続け、フィリピン中央教区は教区を上げて、衣食住の支えだけではなく、弁護士に願って法的な支えをしています。土地の所有権争いで勝訴できないと知った元将軍は暴力を使うことを今は控えているとのことです。

貧しい中で信仰に生きる人々を見て「十字架のにおい」がすると表現する人がいますが、フィリピン中央教区にはそれを感じます。しかし、そのような中で教会の人々は苦しみを分かち合い、担い合い、与え合って生活しており、そこには与え合う「神の愛のにおい」がするのです。

九州教区のわたしたちはフィリピン中央教区の人々との交わりを通して、キリストの十字架、愛、希望にさらに深く触れることができるのではないかと。また九州において人数的には少数者であるわたしたちがキリストを信じ、命と希望を持って生きる姿、長崎の原爆という人類の負の遺産を覚え続け、人類の平和を願い求め、祈る姿はフィリピンの人々の希望と力にもなるのではないかと。以上のように思い、両教区の協働関係を通じて、キリストの豊かな愛、希望を与えられ、主の恵みに感謝し、共に主を賛美したいと願うのです。

九州教区の紋章



これが現在の九州教区(五十嵐主教)の紋章です。「奉仕する人を推薦してください」という教育部のパンフレットの裏にも載っています。「日本聖公会九州教区主教之印1894」という字が見えるでしょう。初代エビントン主教就任が1894年。主教制を象徴するマイター(主教の帽子)と、XPを重ねたキリスト(ギリシャ語のキリストを表わす最初の2文字)

の旗の下に、御言葉(聖書)と sacrament(パンと杯)が、存在していることを表わしています。

フィリピンからのゲスト

9月12日～26日、九州教区へ来られるゲストは、次の方々です。

☆Leon Cadsap 司祭

1967年2月10日生まれ。

タガイタイ聖バルナバ教会牧師およびレメリ・バタンガスキリスト教会管理牧師。常置委員長。タガログ伝道区長。35歳。

☆Douglas Labuten 司祭

1968年3月4日生まれ。

マリキナ聖信 (Holy Faith) 教会牧師。教役者会幹事長。マリラク伝道区長。

☆Eugento Bol-igen 信徒伝道師。

ヌエバ・エチジャ、パラレのウェールズの聖ダビデ教会に所属。現在パスポート申請途中で。

しかし、9月12日までにパスポートが取得できない時、

☆Lyman Alipit 氏 がかわりに来日予定。

タグイの就学前の聖霊幼児成長センター教師。

ゲストの日程

9月12日(木)	福岡空港到着、15:10	泊	福岡
13日(金)	宗像、福岡	泊	福岡
14日(土)	移動日	泊	厳原、佐世保、長崎
15日(日)	対馬、佐世保、長崎	泊	鹿児島
16日(月)	鹿児島集会	泊	鹿児島
17日(火)	宮崎、延岡	泊	延岡
18日(水)	延岡、大分	泊	別府
19日(木)	別府観光 休息	泊	北九州
20日(金)	北九州各教会訪問	泊	北九州
21日(土)	北九州集会	泊	福岡、久留米、大牟田
22日(日)	福岡、久留米、大牟田、	泊	熊本
23日(月)	信徒研修会・熊本	泊	阿蘇
24日(火)	休息 菊池、リデル	泊	阿蘇
25日(水)	福岡で買い物、反省会	泊	福岡
26日(木)	福岡空港から出発 16:10		

以上は、未だ細かいところまでは決まっていますが、15日と22日の日曜日には、3人の方に分かれて、教会で説教あるいは奨励をお願いするよう考えています。

お願いしたいこと

① 食事の費用負担と宿泊の予約。

教会によって、昼間立ち寄る場合や夜その町に宿泊する場合など様々です。宿泊費、交通費は教区が負担します。

しかし、実際のホテル等の予約は、現地の教会でお願いします。尚、食事などは各教会でご負担くださいますよう、お願いします。

② 案内役ボランティア。

今回のゲストには、教区の全教会を回ってもらおうと考え、上記のような日程を考えました。隣接の教会から次の教会までのゲストの案内役を務めていただく案内役ボランティアをお願いします。

③ 各教会や町を紹介するもの

各教会を3人のゲストに回ってもらうのですが、わずかな時間で、沢山の場所を見ることになるし、彼らがフィリピンへ帰国後、報告したり、今後の展開を考える上で、材料になるよう、各教会や町を紹介した写真・地図など、英語の簡単な説明をつけてご用意いただけたら幸いです。

フィリピン中央教区との協働関係の祈り

慈しみ深い主よ、あなたは天地創造によってあなたの力、あなたの支配、あなたの正義を現わし、御子イエス・キリストによって深い愛を現してください。主を賛美するために選ばれたわたしたちは声を一つに合わせ、あなたに感謝・賛美の祈りをささげ、多くの人々に御恵みを分かち合う働きができるようにお導きください。特に、共に祈り、励まし、キリストの働きを担う器として与えられたフィリピン中央教区との協働関係を祝し、用いて、あなたのみ栄えを現わすことができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

フィリピン協働委員会発足

今後、フィリピン中央教区との関わりを持つための九州教区としての担当委員会をこのほど発足させることになりました。委員は、濱生正直司祭、小林史明司祭、柴本孝夫司祭、外池圭二兄、藤井東秀兄、江崎芳子姉。8月15日に第1回目の委員会を開く予定です。

編集後記

今回は、五十嵐主教に文書を書いていただきました。また、9月にゲストを迎えるための、準備のお願いを中心とした内容になりました。

発行所 日本聖公会九州教区宣教局総務部
〒810-0045 福岡市中央区草香江2-9-22
日本聖公会九州教区事務所内
電話 092-771-2050
E-mail d-kyushu@try-net.or.jp

主よ、わが贖い主よ、わが口の言葉、わが心の思いをみこころにかなわしめたまえ。アーメン

聖書

「人が独りでいるのは良くない。彼に合う、助ける者を造ろう。」(創世記2・18)

「あなたたちの中で主の民に属する者はだれでも、エルサレムにいますイスラエルの神、主の神殿を建てるために、ユダのエルサレムに上って行くがよい。神が共にいてくださるように。」(エズラ1・3)

「この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あつけにとられてしまった。・・・彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」(使徒言2・6、11b)

導入

宣教に協働ということは必要なのでしょうか？ 私たちのそれぞれの教区にとって、お互いに友好関係に入るというのは、必要なのでしょうか？ 皆さんのうちから何人かがフィリピン中央教区を訪問するというのは、必要なことなのでしょうか？ 私たちが皆さんを訪問するというのは必要なのでしょうか？ 私たちの何人かは「必要ない」と言い、また、何人かは、「必要だ」と言うかもしれません。しかし、私たちが自分自身の答えを出す前に、時間をさかのぼって、常に存在したものについて、見てゆくことにしましょう。特に、聖書に記されている3つの誕生について、探求してみましょう。第1は、男と女の創造、あるいは人類の形成です。第2は、国家の誕生。第3は、教会の誕生です。

I. 人類の形成

創世記の創造の物語は、神様が創造したものに、どのように秩序と調和がもたらされたか、詳細に説明をしています。これらの物語から、創造されたすべてのものが、相互に依存していることを学ぶことができます。ですから、動物たちや樹木は、人類の敵ではありません。実際には、それらは友人なのです。アダムの場合、神様が見ると、彼はひとりではなく、仲間として動物を所有していましたが、彼はさびしく、一人ぼっちでした。ですから、神様は「人が独りでいるのは良くない。彼に合う、助ける者を造ろう。」と言われたのです。そして、神様は女性を彼のパートナーとして作られました。ですから、これは人類の形成です。

人類の形成は、おそらく、創造の秩序と調和によって

保たれている、一番よく知られた機関でしょう。ですから、人類は、創造の管理人(スチュワード)の仕事を負った存在なのです。明らかに、このことのゆえに、秩序と調和を守るのです。日本の人々は、この優れたつとめの一部を担っています。そして、フィリピンの人々もまたそうなのです。日本の教会は、このつとめを分かち合っています。そして、フィリピンの教会もそうです。私たちはみんな、この役割りを負ってきています。しかし、私たちは、このことを単独ではできません。それゆえ、私たちは他の人に合った、仲間にふさわしい、助力者/パートナーになるのです。

II. 国家の誕生

人類は年を重ねれば知恵も増す、としばしば信じられています。しかし、これが常に正しいわけではないことを、歴史が語っています。アダムとエバは、誘惑に負けました。そして、聖書の叙述に従えば、人類に崩壊は、それによって始まりました。かいつまんで言えば、国家間や人々の間に、たくさんの戦争があったのです。神様が、自分で選んだ民として、イスラエルは、寛大に守られたわけではありません。外国人たちが来て、彼らを征服し、捕囚生活へと追いやられました。しかし、神様は、このことで失望されませんでした。バビロン捕囚の間、神様は、キュロス王を通して、「あなたたちの中で主の民に属する者はだれでも、エルサレムにいますイスラエルの神、主の神殿を建てるために、ユダのエルサレムに上って行くがよい。神が共にいてくださるように。」と言われました。

この中で、キュロス王は、ヤーウェ(主)を彼らの神である、と悟った人々を力づけ、彼らを故郷に帰し、新しい生活、神と共にある生活を始めるように、励ましています。これが、信仰を持った者の新しい生活です。彼らの仕事は、イスラエルの神、主の家の再建です。しかし、それだけではなく、ひとつの国家、聖なる国家を誕生させることです。そして、この聖なる国家は、この世界をある意味で、神様の宮にすることです。もちろんこれは、彼らの故郷で始まります。ユダヤ人の場合、彼らはエルサレムから始めました。皆さんの場合は、ここ日本から。そして、私たちの場合は、フィリピンから。私たちはみんな、この世を神様の宮にするつとめによって、結びついています。

ユダヤ人は、この世をそのようにできたでしょうか。皆さん日本のクリスチャンはどうでしたか。フィリピン人クリスチャンはそれができたでしょうか。いいえ、全

くそうではありません。私たちは、単独ではできないのです。私たちはお互いを必要としています。私たち神の民は、主の家などもろもろのものを再建し、この世界を神様の宮にするつとめが与えられています。ですから、宣教における協働が必要なのです。

III. 教会の誕生

聖霊降臨の時、私たちはもうひとつの誕生、教会の誕生と遭遇します。使徒言行録2章1節から11節は、キリストへの信仰を持った人々が、ひとつの部屋に集まっていたことを告げています。火の舌と強い風を通して、彼らの上に聖霊が降り、外国語を話す賜物が与えられました。外国語を話す賜物とは、理解できる賜物というふうにも解釈できます。ですから、6節と11節の後半は「この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。・・・彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」と述べているのです。

これらの節の中で、私たちは、使徒たちがどんなことを行ない、人々がどんな反応したかが、わかります。使徒/弟子たちは、聖霊を受けるやいなや、すぐに神様の偉大な業を宣言します。それを聞いた人々は、異なった外国語であるのに、彼らのことを理解しました。ですから、理解のための第1の関門、それは外国語なのですが、それは、解消される最初のものなのです。これは、バベルの塔の建設の間に起こったことと矛盾するのですが、私たちがよく知っているように、バベルの塔は、人間の努力によって、神様に近づこうとする試みなのです。しかし、神様はこのおろかさを見ておられました。ですから、神様は彼らに異なった言語を与えられました。お互いが理解できないようにするためです。彼らは分裂され、その結果、彼らの努力は無駄なことになりました。

しかし、聖霊降臨の日、聖霊なる神様がそれを覆されました。今や、異なった言葉話す人々は、しかし神様への信仰を持っていて、神様の偉大な業を理解できるようになりました。バベルの塔の建設中は、彼らの努力は、言葉のために、無価値なものになりました。しかし今や、聖霊降臨の日に、言葉の違いは無価値なものになったのです。それらの出来事は、彼らの持った信仰によるのです。ですから、彼らは、神様の偉大な業を理解できたのです。だから、「彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」と言ったのです。ですから、聖霊降臨は、新しいグループ、同じ信仰と理

解による教会の誕生です。言葉と国籍は、このグループに属するのに障害にはなりません。大切なことは、信仰と理解です。これが私たちの属している教会です。日本の教会は、このグループに入っています。フィリピン人の教会もこのグループに入っています。共通の特徴は「私たちが、今や、自分の故郷の言葉で、神様の偉大な業を理解する」ということです。答えとして、私たちは今、これらの偉大な業を宣言する中で、ひとつになって今、協力し働いているのです。なぜなら、みんな同じ霊、同じ信仰と理解を受けているからです。事実を与えられて、私たちにふさわしい、共に働く仕事が与えられたなら、見る人々はもっと、何がなんだかわからなくなり、「私たちが、今や、自分の故郷の言葉で神の偉大な業を聞こうとは。」と言うのではないのでしょうか。だから、宣教における協働が必要なのです。

友好教区である九州教区とフィリピン中央教区

上に数え上げた3つの誕生は、創造の業が、7日目では終わっていないことを教えてくれています。創造は、神様の深い配慮の見守りの中で、継続する過程なのです。毎日、何か新しいものが、神様によって作られています。それは、いつも私たちが歌っている「来る朝ごとに、朝日と共に（古今聖歌集176番）」が意味していることです。神様には、新しいものが尽きることがありません。神様は、創造の業を続けておられます。しかしながら、重要なことは、私たちがそのことを悟り、それに参加する道です。捕囚の民は、それに応えて、そして彼らは、またひとつの国家になりました。使徒/弟子たちと、最初の聖霊降臨に参加した人々は、正しい土台の上に、正しい足で教会を始めることができました。

つまるところ、すべてこれらのものは、神様と人間の、そして人間の中のパートナーシップの表現です。このことが、九州教区がフィリピン中央教区との協働関係に入る決議をした決断の主たる理由である、と確信いたしました。そして、さらに、フィリピン中央教区が同じ決断をした理由も、このことであると、確信いたしました。

宣教における協働は、必要でしょうか？ その答えはずっと昔に出ています。私たちは、それをしなければなりません。なぜなら、それはもっともはっきりした、神様にある私たちの信仰の表現のひとつだからです。愛の神様への愛する応答、そしてすべてのものを創造された神様への創造的応答です。

父と子と聖霊の御名によって アーメン

(総務部 小林史明 訳)

” 宣教における協働”

L. P. キヤドサップ司祭

はじめに、フィリピンのペンジャミン・ボデンガン主教及びフィリピン聖公会中央教区を代表して、私達の心からなる挨拶と愛と祈りを皆様にお贈りします。また、皆様の九州教区に私達を招待くださって、協働教区としての働きを共にできますことを、ガブリエル五十嵐主教をはじめ、九州教区の皆様に、感謝申し上げます。

「私達の神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように」（I コリ 1 : 3）

これは聖パウロの有名な挨拶の言葉です。パウロのこの挨拶は、初代キリスト教時代に生まれつつあった教会のために、熱心に説き勧めたとき用いた挨拶です。そして、信者たちがキリストの模範にならって共に生き、神の恵みはさらに豊かになりました。

イエスの復活そして昇天の後、ダマスカスへの道で再び現れたイエスとの出会いにより、聖パウロの生活は劇的な変化をしました。そのときから聖パウロは、地中海沿岸地方において伝道をし、教会を建てるようにと導かれました。彼の使徒書簡、手紙は伝道旅行の証となり、あらゆる地方の人々にとって、キリストの恵みと愛についての牧会のよりどころであり、助言となりました。聖パウロはそのとき生まれいた教会を励まし、ふりかかる障害に喘いでいる者たちが互いに祈り、互いに支援、助け合うことを勧めました。聖パウロは特に互いに祈る合うことを重視して、「・・・私達のために祈ってください。主の言葉が、あなたがたのところであつたように、速やかに宣べ伝えられ、あがめられますように」（2 テサ 3 : 1）、また「・・・願いと祈りと執り成しと感謝とをすべてのひとびとのためにささげなさい」（1 テモ 2 : 1）と勧めています。聖パウロは、これらの教会の気持ちを高める確実な力を持っていました。そして、大変に困った問題を抱えていても、祈りの力によりキリストにしたがって前進するように励ましをしました。コリントの信徒への手紙 I, 16 : 1～3 では、聖パウロは祈りの他に、「聖なる者たちのための募金については、わたしがガラテヤの諸教会に指示したように、あなたがたも実行しなさい。私がそちらに着いてから初めて募金が行われることがないように、週の初めの日にはいつも各自収入に応じて、幾らかずつでも手もとに取っておきなさい。そちらに着いたら、あなたが

たから承認された人たちに手紙を持たせて、その贈り物を届けにエルサレムに行かせましょう」と、宣教の基地であったエルサレムの教会は、経済的にも精神的にも支援が必要であることを述べています。それによって、よみがえりのキリストの福音を宣べつたえる力強い働きを得ることができました。数千年前、「互いに祈り、助け合う」、聖パウロのこの言葉は繰り返し用いられていました。現在もまた同じく、いつも心にとめ、それに努めるようにと、聖パウロは私達を励ましています。使徒教父の一人である聖イグナティウスは、シミルナからテラレスの教会にこのように伝えていました。「私達と共におられる神の教会へ挨拶を送ります。敬愛する人々から、私は心も休も新たにされています。イエス・キリストへのきずなは、あなたがたにいつもやすらかに、そして互いに祈ることを勧めます。」

聖パウロの伝道旅行経験は、教会間の良き関係を築きあげるのにもっとも良い実例です。「宣教における協働」という言葉は、このような努力目標に広く使われます。初代キリスト教時代からいつも迫害に遭っていても、「宣教における協働」はあるべき当たり前のことであつたと私は強く信じています。それは、今日の教会が共に神を賛美し、共に前進する関係を求めつづけるという私達に角わされた義務です。

第一に「宣教における協働」とは何かを自分に問いただしてみましよう。この言葉は到達したい目的・目標のもとに集まった個人ないしは組織によってもたらされる拘束的な関係を表わすのに用いられます。聖パウロの時代の異なつた教会があつたときの例をとりあげてみますと、彼は教会に対して「・・・動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。」（1 コリント 15 : 58）と述べています。聖パウロのこの指示はひたすらキリストによる信仰をもち、間違つた教えにより揺らいだりしないと言っています。

第二は 「何故に宣教における協働か」あるいは「何故、宣教における協働が必要なのか」であります。キリスト教信者、特に聖公会信者の私達には、「全ての人が神を求め、神に仕え、自分如く隣人を愛せよ」そして「全人類の正義と平和に努力すること、あらゆる人間の尊厳を保つことです」が求められます。

第三は「宣教における協働をどのように実行するか」であります。それにはいろんな多くの方法があるでしょう。そして当然相互の関係であるでしょう。如何に

なすかについての方法を互いに分け合うことになると思います。

さらに、興味あることに、「宣教における協働」は、二つの教区がもっている賜物を分け合うことができる手段を意味しています。互いにもつ賜物を分け合うと言うとき、それはただ献金をささげようということではなく、それは祈りの豊かさであり、良き執り成しであります。一つ目は、両教区の教役者並びに信徒の絶え間ない交流による伝道の分かち合いであります。これは技術のよき手段、すなわちEメールによってもできます。二つ目に、「宣教における協働」は教育、広い意味の教育です。私達は両教区の政治、経済、文化、社会そして宗教的環境をお互いに知らなければなりません。このことは互いにもつ考えの違いや偏見を完全に打ち払ってくれることなのでしょう。またそれは教区の福音的宣教が如何にあるべきかのビジョンと確信をもたらしてくれます。三つ目には、個人的なレベルに関する要素です。例えば教区の若い人たちの通信による交流があります。若い人たちとしての経験の分かち合いとなり、二つの教区、そして二つの異なった文化の間に永続する関係ができ、活動的な参加ができるでしょう。また相互理解、そして互いの友情が醸し出されることなのでしょう。もしこれが個人的な関係であればロマンスに発展するかもしれません。それは聖なる友好関係であり、祝福されべき活きた証となることなのでしょう。この「宣教に於ける協働」は神にあって花婿花嫁の聖婚式につながることにあります。

為すべきことはたくさんある中で、大切なことは「宣教に於ける協働」を私達の心の中にしっかりと根付くようによく理解されていなくてはなりません。それをなすにあたっては、それらに深く関わらなければなりません。困難な問題の多いこの時代にあって、教会に「宣教に於ける協働」が必要であることは大いに喜ばしいことです。協働関係の両者にとって良いことです。何故なら私達個人に、教会に如何に神の働きがなされかを知ることができるからです。フィリピン中央教区と九州教区がどんなに離れて、私達が離れて住んでいてもその障害は取り除かれることなのでしょう。聖パウロがその時代の教会に互いに祈り、互いに助け合うことを勧めたのと同じように、このことは今日においても大切なことです。私達がキリストの愛、あわれみ、平和、そして正義をより進んで求めるとき、お互いが必要です。

詩人であり神学者であったジョン・ドンの言葉を引くと「人は自分一人だけの孤立した島ではありません。全ての人は大陸、大きな陸地の一部です。」

ここで短い説話をお話し、「宣教に於ける協働」を理解する上での助けとしたいと思います。

教会敷地の教話。

あるところに大変混乱した町がありました。長い間、町の人々は自分たちの力で教会を建設することを話し合っていました。実質的な出費を得るいろんな方法を工夫し、苦しくともやりとげることになりました。最後には必要な経費が集められ、みんなの大きな喜びと達成感を味わうことになりました。彼等自身の教会を持つ夢の幸せが近づいてきたのです。

しかし、教会敷地について思いがけない問題が持ち上がりました。敷地を町の真ん中にすることができなくなったのです。そこで代わりに土地としては町の端っこしかありませんでした。かりに町の北側にしようとする、南の人々が反対しました。逆に南側にしようとする、北の人々が反対しました。その中に町の東側と西側に住む人々からも教会の場所が遠すぎると騒々しい声高かの反対が入って来るようになりました。

難問は解けそうにありませんでしたし、議論は時間と共に激しくなりました。かつて彼らが誇っていた強い結束は崩れそうになり、まったくうわべだけの弱いものになりました。この町は困惑の窮地に落ちてしまいました。

この意見相違の中で、忘れがたい事件が起こりました。まだ、町の人々の間では不愉快なことが渦巻いていましたが、滅多にない干ばつが発生したのでした。熱風は農地をひび割れた土壌にし、稲の穂が実をつける大切な時に熱気が猛威をふるって損害を残します。収穫の時が来たとき、人々のもっとも恐れていたことが来ました。前年はどこでも平均一ヘクタール当たり穀物大袋に90袋の収穫がありましたが、その年の収穫は一ヘクタール当たり5袋を越えることはありませんでした。すぐに、生活費に困って餓死する人がでるのでは囁かれるようになりました。

ここにとても仲の良い二人の農夫がいて、同じ運命にありました。二人は町の直ぐそばの田舎で育ちました。彼らの農地は痩せていて、その年の収穫減少は酷いものでした。それぞれの収穫は一ヘクタール以下の稲作面積でたった一袋しかありませんでした。二人とも彼らの家族、そして友人の生活をとても心配しました。

ある夜、第一の農夫が隣の村に住む友人のことを考えはじめました。彼らはいま食べるものがないのではと独り言をいいますが、その時彼は良いことを思いつきます。

彼は一袋の米収穫を二つの袋に分けました。暗闇に半袋の米を肩に担いで運びます。隣村に通じる道を彼の愛の贈り物を担いで注意深く喘ぎながら歩きだしたのです。同じ時おなじことを第二の農夫も考えていました。彼もまた収穫を半分にして、半袋の米を肩に担いで運びます。真っ暗闇の中を友情の贈り物を担いで隣村に向けて歩きます。丁度二つの村の境界地点で、二人はばったり突き当たりました。「こんな夜中にどこに行く？」と第一の農夫がいえば、「半袋の米をあんたにと、あんたの家に」と第二の農夫が答え、「あんたは？」と尋ねる。第一の農夫は荷物を下ろしながら笑いが止まらない。「わしも少ない収穫の半袋の米をおまえさんのところへとどけるとろじゃった。」

二人の良き友達同士は半袋の米を交換して、暗闇の中で抱き合いました。彼らの目から涙があふれでて、言葉は必要でありませんでした。

祝福されたその夜、この良き友達同士が出会ったその場所に、町は自分たちの教会を建てる決定をしました。以前の意見相違はよそに、彼らはみんな、教会の敷地は天国に一番近いところにあると信じるようになりました。

私の口の言葉と 생각이御心にとどきますように。主よ、私の岩、私のあがない主。神の祝福を感謝します。

アーメン

総務部 板倉 徳也 訳



ラブテン司祭の日程

- 9月17日・火 15:10 福岡空港着
- 18日・水 主教座聖堂、宗像、久留米
- 19日・木 福岡レクイエム → 長崎
- 20日・金 長崎 → 教区歓迎会
- 21日・土 厳原 タガログ語の聖餐式
- 22日・日 厳原 → 熊本での教区信徒研修会
- 23日・月 熊本、降臨教会、黎明教会、阿蘇
- 24日・火 阿蘇 → 大分、別府
- 25日・水 別府 → 小倉
- 26日・木 北九州集会
- 27日・金 北九州 → 福岡
- 28日・土 鹿児島集会（大口と協働）
- 29日・日 鹿児島集会 → 福岡歓迎会
- 30日・月 福岡、評価会、送別会
- 10月1日・火 福岡空港出発 15:00



掛け橋の記念品を贈るラブテン司祭



カメラのパフレットの美人についてコメントする師

ラブテン司祭から、

五十嵐主教へ宛てた感謝の手紙

2002年10月15日付け

親愛なる主教様、
聖信仰教会から、ご挨拶申し上げます。

私が去る9月17日から10月1日まで、主教様の教区を訪問した際、私に示して下さったすべての愛の行為に対して、感謝の気持ちを書かせていただきます。大いなる支えとご親切、すばらしいおもてなしをして下さったこと、改めて感謝申し上げます。

主教様の教区で私が経験しましたことは、本当に深い学びと、刺激に満ちた旅でした。すべてというわけではありませんが、大半の教会では、積極的に私を受け入れてくださいました。主教様の教区の司祭たちや信徒の皆さんは、私に日本的なキリストの愛を示してくださいました。皆さんは、私を案内して教区中を本当によく回ってくださいました。“カンパイ”と彼らに申し上げます。

私の報告書が完了したなら、すぐにその写しを送らせていただきます。来週になるかもしれません。

それでは、主教様がその群れをよく司牧されますよう、ご健康をお祈り申し上げます。
神様の祝福がありますように。

敬具

司祭 ダグラス・ラブテン

聖信仰教会牧師

追伸：カメラをありがとうございました。それは大変私の助けになっています。

主教様の素敵な奥様によろしくお伝えください。

ダグラス

フィリピン中央教区から

ダグラス・ラブテン司祭を迎えて

9月17日（火）午後三時、福岡空港国際線に到着。三人をお招きしていたが、日本政府からビザが出されず、ぎりぎりのお一人の来日だった。

二週間の短いようでハードな行程を乗り切りお別れ会、反省会を迎えた時はさすがにお疲れの様子でした。

始まったばかりの両教区の協働、交流でしたが、私たちの思いを超えた神様のお計らいとともに各地で豊かな交わりが与えられたことを共に感謝致します。

Fr. (ファザー) ダグラスはお帰りの時九州教区の印象を次のように話されました。

「(紙面の都合で概略) 来るまでは九州教区は中央教区より大きいと思っていましたが、聖職の数もほぼ同じで教会の所在も離れ離れで自分達と似ていると感じました。

北九州では、各教会がいつも協働し、聖職信徒も助け合っているのが分かりました。自分達も四つの教会が協働していますので良い経験でした。九州は信徒の方が積極的です。自分達の教区と違うので学んで帰ります。全体として精力的に見えます。牛島執事のギターを用いてみ言葉を伝える働きも、中野司祭の日曜学校での働きも印象的でした。後も人的交流を進めたいです。九州にもより長く滞在し沢山見たいです。自分の伝道区でも受け入れ可能です。

中央教区の課題は“自立”です。資金を積み立てています。神学生が少ない。神学生になる前にお金が無くなり学校を止めてしまうのです。

最後に、各地でも皆様から温かい歓迎を受け心から感謝しています。またお会いしたいです。」

その他の話し合いの中から協働の話題：◇厳原で土曜日に、働くフィリピン女性のためにタカログ語による聖餐式が行われ26名が出席。驚きと感謝。◇フィリピン神学生のため支援出来ることの検討。◇フィリピン神学校への聖職の留学、英語とタカログ語の習得。◇青少年のツアーを企画：教会の働きを体験する等。

(以上文責外池)

[教区報「はばたく」11月号より転載]